

捨子養育院における芸術と慈善

——ヘンデルの〈メサイア〉慈善演奏会の背景

岩 佐 愛

1. はじめに

1742年にダブリンで初演されたヘンデル (Geroge Frideric Handel, 1685-1759) の宗教的オラトリオ〈メサイア〉 (*Messiah*, HWV 56) は、現在でも英語圏で最も頻繁に演奏される人気作品の一つであり、またヘンデルの代表作として常に高い評価を受けてきた作品でもある。

この〈メサイア〉の初演でヘンデルは大きな成功を収めたものの、翌1743年にロンドンのコヴェント・ガーデン劇場で行われた〈メサイア〉上演では高い評価を得ることができなかった。それどころか、聖書の言葉を用いた宗教作品を世俗の劇場で上演することに対し懐疑的な人々からの強い反発を招いてしまう。このような反応を受けてか、ロンドンで〈メサイア〉をヘンデルが上演する機会は、この年以降著しく少なくなってしまった¹⁾。

こうした状況に変化を起こす一つの大きな契機となったのが、1750年5月にロンドンの捨子養育院 (Foundling Hospital)²⁾ 附属の礼拝堂で開か

1) 初演から1750年にいたる〈メサイア〉上演史に関する資料は次の研究にまとめられている。渡部恵一郎 (解説) 『ペーレンライター原典版 (BVS-3) ヘンデル：メサイア』、別冊 参考資料 (全音楽譜出版 2001年)；村原 (田中) 京子、「〈メサイア〉研究ノートⅠ：作品成立と初演・再演の背景をめぐって」、鹿児島大学教育学部研究紀要 (人文・社会科学編)、第55巻 (2004年)、63-78頁。

2) 施設の正式名称は「野晒しで遺棄された子供たちの養育および教育のための慈善施設」

れた〈メサイア〉の慈善演奏会と考えられる。1749年以降、〈メサイア〉はヘンデルのオラトリオ上演シーズンを締めくくる作品としてだけでなく、養育院での慈善演奏会の演奏曲目として定着してゆく。とはいえ1749年3月にコヴェント・ガーデン劇場で行われた〈メサイア〉公演は、決して特別な好評を得たわけではなかった。ところが、翌1750年5月1日に養育院で開かれた〈メサイア〉慈善演奏会は大盛況となり、1日の演奏会が満席で入場できなかった聴衆のために15日に再び演奏会を開く必要が生じたほどであった。この二度の演奏会からの収益は（諸経費差し引き後で）939ポンドを超え、慈善演奏会の成功は、養育院の財政に大きく貢献した³⁾。

養育院での〈メサイア〉慈善演奏会は翌1751年にも好評のため二日間にわたって催され、これらの演奏会の成功はヘンデル晩年の活動に重要な位置を占めることとなる。というのも、これ以後ヘンデルが没する1759年4月まで、毎年の恒例行事として〈メサイア〉演奏会が養育院で開かれることとなるためである⁴⁾。ヘンデルの没後も養育院での〈メサイア〉慈善演奏会は続けられ、1777年まで17年間にわたって毎年開かれた。1760年以降の演奏会の継続は、ヘンデルの遺言により〈メサイア〉の写譜が養育

(Hospital for the Maintenance and Education of Exposed and Deserted Children) であるが、本稿では通称を用いる。

- 3) 1750年5月の演奏会の詳細については以下の資料を参照。Ruth K. McClure, *Coram's Children: The London Foundling Hospital in the Eighteenth Century* (New Haven and London: Yale UP, 1981), p. 70; Donald Burrows, 'Handel and the Foundling Hospital,' *Music and Letters*, 58 (1977) : 269-77, p. 273; Donald Burrows, *Handel, The Master Musicians*, series ed. Stanley Sadie (Oxford UP, 1994), pp. 299, 331, 340; R. H. Nichols and F. A. Wray, *The History of the Foundling Hospital* (London: Oxford UP, 1935), p. 203.
- 4) 1749年から十年の間に養育院で開かれた十四回の慈善演奏会の内〈メサイア〉の全曲演奏会が十二回を占めた。その内七回はヘンデルが直接指揮をとったものであり、この間に使用された指揮用スコア（総譜）が現在〈「捨子養育院版」メサイア〉として知られるものである。複数の〈メサイア〉異版の重要性については次の研究に指摘がある。村原（田中）京子、「〈メサイア〉研究ノートII：1741年から1759年の演奏とVersionをめぐって」鹿兒島大学教育学部研究紀要（人文・社会科学編）、第56巻（2005年）、58-64頁。

院へと寄贈されたことで可能となったものでもある。

こうして〈メサイア〉は、養育院にとって特別な意味を持つ作品となった。また、この作品が今日に至るまでイギリス国内にとどまらず世界中で愛され、(殊に慈善演奏会用の曲目として)特別な位置を占めてきた作品であることは疑いない。しかし1750年のロンドンでは決して特別な人気作品とされなかった〈メサイア〉が、なぜ養育院の慈善演奏会で大きな成功を収めることができたのか。養育院での〈メサイア〉慈善演奏会の成功は、ヘンデル没後の〈メサイア〉受容とも大きく関わる問題である。そこで本稿では、当時の養育院における芸術活動と慈善活動の密接な結びつきに着目することで、視覚性や可視性の文脈から〈メサイア〉演奏会成功の背景を解き明かしてゆきたい。

2. 養育院附属礼拝堂の建設と慈善行事

養育院附属の礼拝堂でヘンデルによる〈メサイア〉の慈善演奏会が最初に開かれたのは、1750年5月1日のことであった。この演奏会の開催に先立ち、礼拝堂の開堂式でのヘンデルによるオルガン演奏が予告されたが、オルガンはおろか礼拝堂すら未完成状態のまま演奏会が催される事態となった⁵⁾。こうした状況にも関わらず、5月1日の演奏会には1500人あまりの聴衆が殺到する騒ぎとなったのである。その結果、礼拝堂に入りきれなかった聴衆のために二週間後に再び同じ演奏会が開かれた。これら二度の演奏会における一枚半ギニーの入場券の販売数は1986枚、招待券を含

5) 当日にヘンデルが演奏を予定していたのは、自ら礼拝堂に寄付するため1749年7月に注文したオルガンだった可能性が高いが、「オルガンに関してヘンデルは不機嫌であった」とG. ハリスは語っている。Donald Burrows and Rosemary Dunhill, eds., *Music and Theatre in Handel's World: The Family Papers of James Harris, 1732-1780* (New York: Oxford UP, 2002), p. 271. この演奏会の予告広告は1750年4月21日以降に複数出されている。Otto Erich Deutsch, *Handel: A Documentary Biography* [1955], Reprint (Norton, 1974), pp. 686-87.

むチケットの合計は2700枚に達した⁶⁾。演奏会がこうした成功を収めたことは、礼拝堂の建設が養育院の慈善行事に大きな位置を占め、既に1740年代後半から世間の耳目を集めていた経緯と決して無関係ではなかった。

そもそもなぜヘンデルは、未完成の礼拝堂で開堂式を兼ねた演奏会を開くように依頼されたのか。その理由として、前年の5月27日に（やはり未完成状態の）礼拝堂でヘンデルが開いた最初の慈善演奏会の人気と礼拝堂建設への財政的貢献が挙げられる⁷⁾。この演奏会は礼拝堂の建設資金集めのためにヘンデルが開催を申し出たものであり、演奏会の収益を養育院に寄付する目的で開かれた最初の慈善演奏会でもある。この慈善演奏会開催による献金という手法は、「組織の一員としてよりも、彼独自の方法で慈善活動に協力する」ための方法であるとヘンデルは考えていた⁸⁾。こうしたヘンデルの考えは、慈善演奏会の開催を申し出た数日後に養育院の理事に選出されたヘンデルが就任を辞退していることから明らかである⁹⁾。

6) 半ギニー (half-guinea) は当時の通貨で10シリング6ペンス (10s. 6d.) に等しい。これは当時のロンドンのオペラ座の最上席（ボックスまたは平土間席）の値段に相当するため決して少額とは言えない。Hume は現代のロンドンのオペラ座 (Royal Opera House) の最高価格との比較から、現在の175ポンド相当に換算可能な額であるとする。特に劇場入場料や美術品といった生活必需品以外の娯楽や贅沢品の価格に関し、当時の通貨の購買力を現代の通貨に換算する際の問題については次の論文を参照。Robert D. Hume, 'The Economics of Culture in London, 1660-1740,' *Huntington Library Quarterly*, 69 (2006): 487-533, esp. pp. 490-500; David Mannings, 'Notes on Some Eighteenth-Century Portrait Prices in Britain,' *Journal for Eighteenth-Century Studies*, 6 (1983): 185-96.

7) 1749年5月の演奏会の詳細については以下の資料を参照。Deutsch, pp. 670-71, 673; Burrows (1977), p. 271; Burrows (1994), p. 300; McClure, p. 69.

8) McClure, p. 70.

9) 理事 (the governor) となるための登録料50ポンドの支払いを免れるための辞退ではなくむしろ、この後も継続的に養育院への経済的支援を行うための方策であったと考えるべきである。1749年当時、養育院には300名を超える人々が理事として名を連ねていたが、その殆どは養育院の普段の活動と無関係であったと考えられる。各理事の就任時期については次のリストを参照。Appendix, 'Register of Governors,' in Nichols and Wray, pp. 345-62.

この1749年の慈善演奏会の人気は、養育院の重要なパトロンであるフレデリック皇太子夫妻臨席のもとで開かれることで一層高まったと考えられるが、ヘンデルが用意した演奏会プログラムも聴衆にとって非常に魅力的なものであった。「ヘンデル作曲の器楽と声楽」からなる曲目は当時の話題作・最新作を含む、非常に多彩な内容であることが予告された。中でも注目すべきは〈王宮の花火の音楽〉(*Music for the Royal Fireworks*, HWV 351)とアンセム「弱き者を思いやる者は幸福なり」(‘Blessed are they that considereth the poor,’ HWV 268)、それに〈メサイア〉中の合唱曲「ハレルヤ・コーラス」である。

〈王宮の花火の音楽〉は、慈善演奏会のちょうど一ヶ月前の1749年4月27日にロンドンのグリーン・パークで披露されたばかりの最新作であった。この作品はエクス・ラ・シャペルの和平条約締結を祝って開かれた王室主催の花火大会用に大規模な器楽曲として作曲され、前評判も高かった作品である。そのため本番の六日前にロンドンのヴォクソール庭園で、公開リハーサルと称して演奏が披露されることとなった。この演奏を聴こうと詰め掛けた大勢の人々(1万2000人以上とも言われる)が一斉に馬車でロンドン橋を渡って対岸のヴォクソールへ向かおうとしたため、大変な交通渋滞を引き起こしたという逸話は半ば伝説と化しているほどである¹⁰⁾。つまりヘンデルは、世間の注目を集めた最新作を提供することで、養育院での慈善演奏会の成功を確かなものにしたと考えられる。

また、養育院のために作られた新作のアンセム(HWV 268)は、後に「捨子養育院アンセム」として知られるようになるもので、慈善活動を通じたヘンデルと養育院のつながりを如実に示す作品でもある。このアンセムの音楽や歌詞のほとんどは、既存の英語アンセムや英語オラトリオ作品からの寄せ集め(pasticcio)に過ぎない¹¹⁾。だが冒頭の詩句「弱きもの

10) 当時のヴォクソール庭園では入園料の1シリングを支払えば誰でも、園内で演奏される音楽を楽しむことができた。

11) 〈キャロライン王妃のための葬送アンセム〉(1737年)、オラトリオ〈スザンナ〉(1749年)

を思いやる者は幸いである」(‘Blessed are they that considereth the poor’)も示すように、養育院の設立趣旨に適ったテキストを聖書から注意深く選び用いることで、養育院の慈善活動への積極的な貢献を聴衆に促すことが意図されたと考えられる。

演奏会を締めくくるこのアンセムの終曲として〈メサイア〉の合唱曲「ハレルヤ・コーラス」が歌われたことも、これ以降、養育院での〈メサイア〉全曲演奏会が恒例行事化することを考えると意義深い。現在でも〈メサイア〉第二部を締め括る「ハレルヤ・コーラス」は合唱曲として人気が高く、単独で演奏される機会も多い。だが当時のロンドンで〈メサイア〉の全曲演奏会が決して好評を得ていなかった事実を考慮すれば、この慈善演奏会での演奏の成功が、後の〈メサイア〉演奏会の成功へと続くきっかけの一つとなった可能性は高いだろう。

この他に最初の慈善演奏会(1749年)では、〈王宮の花火の音楽〉と同様にエクス・ラ・シャペルの和平条約締結を祝って王室礼拝堂のために作曲された「和平アンセム」(‘Anthem on the Peace,’ HWV 266)が演奏され、ヘンデルや養育院と王室との繋がりの密接さが強調された¹²⁾。また、礼拝堂の開堂を祝うに相応しく、やはり1749年3月に初演されたばかりの新作オラトリオ〈ソロモン〉(*Solomon*, HWV 67)から、寺院の建立を讃える合唱曲(‘Praise the Lord with Harp and Tongue’)が演奏され、祝典ムードを高めたことが想像される。

しかし冒頭に述べたように、最初の慈善演奏会(1749年)と最初の〈メ

と〈メサイア〉から音楽と歌詞が、〈エステル〉(1718年キャノンズ初演版)から歌詞が再利用された。聖書の「詩篇」第41から採られた冒頭の詩句を初めとするこれらの英語テキストの編纂は、ヘンデル自身が手がけたものとされる。George Frideric Handel, *The Foundling Hospital Anthem*, ed. by Donald Burrows (Edition Peters, 1983), p. 138.

12) 養育院は1739年10月17日に国王ジョージ二世から勅許状(Royal Charter)を得て開設されたものであり、フレデリック皇太子もこの時に理事の一人として選出された(McClure, p. 28; Nicholas and Wray, pp. 249, 348, 350)。また、当初24日に予定されていた演奏会が皇太子の要望により27日に延期された経緯からも、王室関係者の演奏会出席が重視されたことがうかがわれる(McClure, p. 69)。

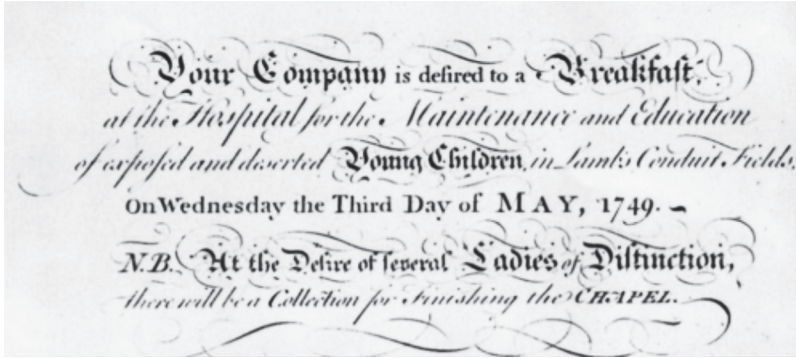
サイア)演奏会(1750年)は共に礼拝堂の開堂を開催理由としながらも、事実上未完成状態の礼拝堂で開かれていた。実際、礼拝堂の完成を祝う献堂式が正式な形で開かれたのは1753年4月16日のことであり、この間に実に七回(「公開リハーサル」を含み八回)にわたり、開堂式を口実とする演奏会が礼拝堂で開かれていたことになる¹³⁾。1749年から52年にかけての慈善演奏会に関して、礼拝堂開堂式が単なる開催の口実に過ぎなかったことは、献堂式に不可欠な儀式(聖職者による説教)が1753年になってようやく手配された経緯からもうかがわれる。

仮に当初は1749年5月に礼拝堂の完成が予定されていたにしろ、不足する建設資金を募るための慈善演奏会は、結果的に礼拝堂の完成まで繰り返し行われることとなったのである。実際、1749年の時点で礼拝堂の建物本体はほぼ完成していたものの、建物の内装や家具などは未完成のままであった。ここに、ヘンデルによる最初の慈善演奏会を恒例の〈メサイア〉演奏会の前段階にだけでなく、礼拝堂完成に向けた募金活動の最終段階に位置づける必要が生じる。そこで、1749年以前の礼拝堂建設に向けた慈善活動の軌跡をたどり、ヘンデルの慈善演奏会へと繋がる文脈を補うこととする。

礼拝堂の建設計画は1746年4月に公表され、約一ヶ月間にわたって新聞数紙に建設資金を集めるための寄付金募集案内が掲載された¹⁴⁾。さらに5月に入り実際に礼拝堂の建設が開始されると、さっそく寄付金集めの

13) 1749年の慈善演奏会と1750年の二回の〈メサイア〉演奏会に加え、1751年4月18日と5月16日、1752年4月9日の〈メサイア〉演奏会、および1753年1月25日の公開リハーサル(4月16日の礼拝堂献堂式に向けたもの)を加えた数。この間の演奏会の詳細については以下の資料を参照。Burrows (1994), pp. 351, 353-54; Burrows (1977), p. 274; Deutsch, pp. 706-710, 731; Nicholas and Wray, pp. 207-208.

14) 礼拝堂建設の経緯については以下の資料を参照。An Account of the Hospital for the Maintenance and Education of Exposed and Deserted Children (London: printed by order of the governors, 1749), p. xii; Benedict Nicolson, *The Treasures of the Foundling Hospital*, with a catalogue raisonné based on the draft of a catalogue by John Kerlake (Oxford: Clarendon Press, 1972), p. 39; McClure, pp. 65-66; Nichols and Wray, p. 201.



【図1】1749年5月3日の公開朝食会への招待券

ための「公開朝食会」が開かれる。この催しには多数の貴族や貴婦人らが参加し、2シリング6ペンスの切符を675枚販売することでおよそ596ポンドもの寄付金を集めることに成功した【図1】。この試みの成功を受けて以降、公開朝食会は恒例行事化されることとなる。

翌1747年の公開朝食会の人気は更に高まり、参加希望者があまりに多いため、朝食会への入場は理事が前もって予約した切符を持つ者に限定する必要が生じた。さらに同日の午後には、引き続き礼拝堂の起工式も行われている¹⁵⁾。この頃から、養育院の公開朝食会は「貴婦人たちの朝食会」の通称で知られる人気の高い慈善行事となってゆく。こうして1748年の朝食会でも参加希望者多数のため、理事による入場制限が行われた。ところが1024名あまりの参加者数にも関わらず、経費差し引き後の収益は僅か3ポンド余りに目減りしてしまった。

ちょうどこの頃、養育院では新たな財政問題が発生する。当初計画された礼拝堂建設費用(4195ポンドあまり)が予想以上に膨らみ、養育院の理事たちは不足する建設資金を調達するための新たな献金集めの方法に頭を悩ませることとなったのである。そこで1749年5月3日には恒例の朝

15) Nicolson, pp. 34, 40.

食会に加え、未完成の礼拝堂で孤児たちの「洗礼式」を行い公開する運びとなった。そのため再び参加希望者数が大きく膨らみ混乱の起きる恐れが生じ、治安官と六人の助手が群衆整理に駆り出されたほどである¹⁶⁾。この洗礼式もほぼ完成した礼拝堂の仕上げに必要な資金を集める目的で開かれたものであったが、ちょうどその翌日（5月4日）に出されたのがヘンデルによる慈善演奏会開催と演奏会の収益寄付の申し出であった¹⁷⁾。

以上の経緯からは、1750年に養育院附属礼拝堂で開かれたヘンデルの第一回〈メサイア〉演奏会の成功には、作品の魅力や演奏の巧拙といった音楽的要因だけでなく、より複合的な要因が複雑に関わるものと考えられる。まず前年の1749年に開かれた最初の慈善演奏会の成功は演奏会プログラムへの〈メサイア〉導入の契機となったばかりでなく、その後の〈メサイア〉慈善演奏会の運営モデルともなった可能性が高い。また、演奏会会場として使用された未完成の礼拝堂が、数年間にわたる公開朝食会や洗礼式の開催によって既に世間の高い注目を集めていた事実も確認された。そこで次に、養育院における芸術家たちの慈善活動が、ヘンデルの〈メサイア〉慈善演奏会に先立ち世間の耳目を集めていた事実に着目し、〈メサイア〉演奏会成功のもう一つの背景を明らかにしたい。

3. 芸術家たちによる慈善

ヘンデルの第一回〈メサイア〉慈善演奏会の前日にあたる1750年4月

16) Nichols and Wray, p. 200; Nicolson, p. 34; McClure, p. 34.

17) ヘンデルが5月4日の委員会に出席したのは、前年に理事に選出された知り合いの楽譜出版業者ウォルシュ（John Walsh）の仲介によると Burrows は推測する（Burrows (1977), p. 270 ; Burrows (1994), p. 299）。だが1746年から理事を務める画家ハドソンも前年に〈メサイア〉の楽譜と共にヘンデルを描いた肖像画の制作に着手しており、ヘンデルと養育院の仲介役となった可能性がある。ハドソンの肖像画制作についてはカタログを参照。*Handel: A Celebration of His Life and Times 1685-1759*, ed. by Jacob Simon (London: National Portrait Gallery, 1985), p. 43.

【図2】 ホガース、〈フィンチリーへの行軍〉(*The March of the Guards to Finchley*)、1749-50年、キャンバスに油彩、102.5 × 135.7cm (© The Foundling Museum, London)

30日午後二時、養育院では画家ホガース (William Hogarth, 1697-1764) の発案による慈善抽選会が開かれていた。この抽選会に賞品として提供されたホガースの油彩画〈フィンチリーへの行軍〉【図2】は、当選者である養育院へその日の内に贈呈された。以降、この絵は委員会室 (The Committee Room) に飾られ、養育院への訪問者に公開されることとなる。

翌5月1日に〈メサイア〉演奏会のため、画家ハドソン (Thomas Hudson, 1701-79) らと共に養育院を訪れたヘンデルの友人 G. ハリスは、ハドソン自身の作品や3月に完成したばかりのカザーリ (Andrea Casali, 1720-83) の祭壇画〈マギの礼拝〉【図3】に加え、ホガースやハイモア (Joseph Highmore, 1692-1780) らの絵画作品を養育院内の複数の部屋で

【図3】カザーリ、〈マギの礼拝〉、1750年、キャンバスに油彩、
100 × 81.5 インチ (© The Foundling Museum, London)

目にしたと日記に記している¹⁸⁾。1746年から養育院の理事を務める画家ハドソンは、既に二点の肖像画を養育院に寄贈しており、共に演奏会に赴いた友人ハリスに自作を含む養育院の絵画コレクションを案内したとして何の不思議もない人物である。

18) *Music and Theatre*, p. 271. 完成済みの絵画は既に1749年から理事会室に展示されていたが、カザーリの祭壇画が礼拝堂に設置されたのは1752年3月31日のことである。恐らくハリスは額装を終えたばかりの絵を養育院内の一室で見たものと思われる (Cf. Nicolson, pp. 42 and 62)。

ここから、ヘンデルの〈メサイア〉慈善演奏会が人気を集めたもう一つの背景が浮かび上がる。つまり、演奏会のために養育院を訪れる人々の目的の一つが、養育院に飾られた美術作品の鑑賞にあった可能性である。というのも当時ロンドンには常設の美術品展示施設は存在せず、人々が絵画を鑑賞できる場は裕福な個人の邸宅などに限られていた。そのため訪問者に常時公開されていた養育院の絵画コレクションは、いわば最初的美術ギャラリーとしての役割を担うこととなったのである¹⁹⁾。

したがって当時、養育院の美術コレクションは人々の好奇心をかきたて、養育院を訪れる強い動機の一つとなっていたと考えられる。また養育院側から見れば、単なる肖像画コレクションにとどまらない美術作品の展示スペースを設けることで、ロンドン市街地の外れに位置する養育院へと篤志家の人々の足を向けさせる狙いがあったものと推測される²⁰⁾。さらに、こうした集客手段としてのみならず、養育院の美術コレクションの内容は〈メサイア〉演奏会を通じたヘンデルと養育院の結びつきとも密接に関連するものと考えられる。そこで、ここではヘンデルの〈メサイア〉と養育院の美術コレクションとの関連を中心に見てゆくこととする。

理事として養育院に関わった芸術家たちのうち最も早くから、また最も密接に養育院の絵画コレクション形成に関わった画家が上述の Hogarth である。1740年に Hogarth が寄贈した養育院の創立者コラム船長の全身肖像画が、現在も Hogarth による肖像画の最高傑作の一つに数えられている

19) 1754年創立の芸術推進協会 (Society for the Encouragement of Arts, Manufactures, and Commerce) が最初の公開展覧会を開いたのは1760年のことであり、王立美術アカデミー (Royal Academy of Arts) の設立は更に遅く1768年である。公開の美術展覧会を巡る当時の状況については次の研究を参照。Martin Postle, 'The Foundling Hospital and the Development of the Public Exhibition,' in *Enlightened Interest: The Foundling Hospital and Hogarth*, ed. by Rhian Harris and Robin Simon (London: Thomas Coram Foundation for Children, 1997): 22-25.

20) ソルキンは、こうしたアイディアの発案者が Hogarth であった可能性を示唆する。David Solkin, *Painting for Money: The Visual Arts and the Public Sphere in Eighteenth-Century England* (New Haven and London: Yale UP, 1992), p. 165.

ことが示すように、ホガースと養育院の関わりは幾つもの重要な作品を生み出すこととなった。このホガースと彫刻家ライスブラック (Michael Rysbrack, 1694-1770) が1746年から47年にかけて共に取り組んだのが、理事会室 (The Court Room) の装飾と絵画コレクションの形成であった²¹⁾。

現在でも移築保存された理事会室で当時の主な作品を見ることができるが、当時この部屋にはライスブラックの彫刻〈航海術と農業にいそしむ慈善と子供たち〉に加え、歴史物語画四点と風景画八点が飾られていた。その内訳を見ると十八世紀中期のイギリスを代表する画家たちの作品であることがわかる。まず大型の歴史画としてホガースによる〈ファラオの娘の下へ届けられたモーゼ〉に加え、ハイモアの〈ハガルとイシマエル〉とヘイマン (Francis Hayman, 1708-76) の〈葦の中での幼児モーゼの発見〉、それにウィルズ (James Wills, d.1777) の〈キリストの下へ届けられた幼子たち〉【図4】の四点が飾られた。これらの歴史画の両側にはそれぞれ、養育院を含むロンドンの病院を描いた小型の円形風景画が飾られた。この内ウエイル (Samuel Wale, 1721-86) が三点、ヘイトリー (Edward Haytley, fl. 1740-61) とウィルソン (Richard Wilson, 1713-82) がそれぞれ二点ずつ、それに若きゲインズバラ (Thomas Gainsborough, 1727-88) が一点を手がけている²²⁾。

つまり、当時のイギリス美術界の第一線で活躍する芸術家たちの作品十六点あまりが養育院内の一室に集められ、訪問者に公開されていたことになる。こうしてイギリス人画家の作品のみを展示公開する常設のギャラ

21) ライスブラック自身も既に1745年に理事に選出されている。

22) 別室には養育院の理事や後援者 (基金寄贈者) らを描いた大型の肖像画が集められ展示された。ホガースの〈コラム船長〉(1740年)、ハドソンの〈ジョン・ミルナー〉(1746年) と〈セオドア・ジェイコブセン〉(1742年)の三点の全身肖像画に加え、ハイモアの半身肖像画〈トマス・エマソン〉(1731年)も公開されていたが、〈コラム船長〉は1747年12月16日にラムジー (Allan Ramsay, 1713-84) の〈ミード博士〉(1747年) と入れ替えられて秘書室へと移動され、1756年11月には全ての全身肖像画が東翼の女子食堂へと移動された (*An Account of the Hospital*, p. xv; Nicolson, pp. 33-34)。

【図4】ウィルズ、〈キリストの下へ届けられた幼子たち〉、1746年、キャンバスに油彩、68×68.5インチ（© The Foundling Museum, London）

リーは、当時のロンドンには存在しなかった。このことが、養育院での作品展示が後の王立芸術アカデミー（Royal Academy of Arts）などによる公開展覧会の先駆例とみなされる理由でもある。

この理事会室に飾られた美術作品は全て芸術家たちの篤志による寄贈品であり、その旨が明示されていた。こうした寄付行為への返礼として、養育院に作品を寄贈した芸術家たちは1746年12月31日に「芸術家理事」（Artist Governors）として選出されている²³⁾。ハドソンもこの時に新たに理事として加わった十一名の画家の一人である。1749年に一度は理事

23) 以後毎年11月5日には芸術家理事委員会の会合が開かれ、養育院に財政的負担を一切かけることなく、即ち寄贈により養育院の内装を手がける方法について話し合うこととなる（McClure, pp. 66-67）。

となることを拒んだヘンデルだったが、後の1750年5月に再び理事に選出された際に就任を受諾したのも恐らく同様の理由からであろう。というのも5月の会合ではホガースによる絵画の寄贈への感謝と共に、ヘンデルによる礼拝堂用オルガンの寄贈にも養育院から感謝が示されたからである²⁴⁾。つまりヘンデルも芸術家理事の前例に倣い、養育院への寄付（慈善演奏会の収益寄付とオルガン寄贈）や芸術的貢献（指揮や演奏）への返礼として理事に選出されることを受け入れたものと考えられる。

既に触れたように画家ハドソンは、1746年に芸術家理事として選出されるにあたり、養育院副院長ミルナーと養育院の設計者で理事のジェイコブセンの全身肖像画二点を養育院に寄贈していた²⁵⁾。さらにハドソンは、5月の〈メサイア〉慈善演奏会開催に先立ち（4月18日）、ヘンデルの肖像画を養育院に寄贈することを申し出ている²⁶⁾。

だがこの時点で肖像画は制作されておらず、養育院がヘンデルから肖像画のモデルとなる同意を取り付けただけの段階であった。それにも関わらず養育院は早々とハドソンに感謝状を送り、ヘンデルの同意を伝えている。ところが、その後ハドソンが寄贈したはずのヘンデルの肖像画が養育院に存在した記録が残されていないため、この作品は結局描かれなかったものと考えられる²⁷⁾。

そこで、現在ロンドンのヘンデル・ハウス博物館に飾られているイギリス王室所有の肖像画【図5】と、この時ハドソンから養育院へ寄贈が約束されたヘンデルの肖像画の関連について考えてみたい。なぜなら、この楯

24) McClure, p. 70; Burrows (1994), pp. 299, 331; Nichols and Wray, p. 203.

25) ハリスが1750年5月1日の〈メサイア〉演奏会の際に養育院で眼にしたハドソンの絵とは恐らく、この二点の肖像画であろう。1740年代から50年代にかけて肖像画一点あたり最も高額報酬を得ていたのがハドソンであり、全身肖像画一点につき48ギニーを請求していたとされる。これは、ジョージ二世の首席画家シャクルトン (John Shackleton, d. 1767) が国王の肖像画から得ていた報酬50ポンドと同等の額である (Mannings, pp. 189-90)。また、このシャクルトンも国王の全身肖像画を1758年に養育院に寄贈している。

26) Nicolson, p. 29, n25.

27) Ibid.

【図5】
ハドソンの原画に基づく、〈ジョージ・フレデリック・ヘンデル〉、1756～60年、キャンバスに油彩、80.6×72.1cm (The Royal Collection © 2008, Her Majesty Queen Elizabeth II) RCIN 4056

円肖像画は養育院の絵画コレクションとヘンデルの〈メサイア〉演奏会との密接な結びつきを示す視覚的証拠の一つと考えられるためである。

ハドソンによるヘンデルの肖像画としては、1749年と56年に制作された大型の全身肖像画二点が有名である²⁸⁾。しかし王室所有の肖像画は楕円形キャンヴァスに胸像として描かれ、葦 (bulrush) を模ったロココ調の額に入れられている点で他の肖像画二点とは大きく異なる²⁹⁾。この楕円肖像画の作者や来歴は不明だが、作品について次のような指摘が既になされている。まず1756年の肖像画【図6】に比べ、より若々しく生気にあふれた表情のヘンデルが描かれている点、そして額に用いられた葦のモチーフが預言者モーゼの象徴となっている点である³⁰⁾。

28) 1749年のサインがある「ハンブルク」肖像画 (ハンブルクの Staats- und Universitätsbibliothek 所蔵) と、〈メサイア〉の台本作者であるジェネズによって注文された1756年の肖像画 (ロンドンの National Portrait Gallery 所蔵) 【図6】。「ハンブルク」肖像画は、ヘンデルが1750年にドイツを訪れた際にハレの親戚に託したものとされる。Handel, ed. by Simon, pp. 43-44 (Plates 11 and 12).

29) 「bulrush」とは一般には水辺に生えるホタルイ属およびガマ科植物の総称であるが、聖書ではカヤツリグサ科のバビルスを指す語として用いられる。

30) Jacqueline Riding, 'The Purest Benevolence': Handel & the Foundling Hospital, (London,

【図6】 ハドソン、〈ジョージ・フレデリック・ヘンデル〉、1756年、キャンパスに油彩、238.8 × 146.1 cm (© National Portrait Gallery, London) NPG 3970

【図7】 ハドソン、〈ジョージ・フレデリック・ヘンデル〉、1746~56年、オイルスケッチ、76.8 × 63.8 cm (The Royal Collection © 2008, Her Majesty Queen Elizabeth II) RCIN 400960

この楕円肖像画は、姿勢や衣服の類似から、盲目となった晩年のヘンデルを描いた1756年の肖像に基づく作品の一つと見なされることもある³¹⁾。だが、この肖像に描かれたヘンデルの表情は明らかに、王室所蔵のハドソンの油彩スケッチ【図7】に基づくものと思われる。このスケッチは、構図や服装との類似から1756年の全身肖像画の元絵ともされるが、正確な制作年は不明である³²⁾。仮にこのスケッチがヘンデルの失明前の姿を描

Handel House Museum, 2003), p. 13.

31) もう一点は、オックスフォード大学所蔵の楕円肖像画である (*Handel*, ed. by Simon p. 44)。

32) 作品の状態について現地調査を行うことができなかったため、ハドソンによるヘンデルの楕円肖像画と油彩スケッチについての詳細情報は2009年9月にRoyal CollectionのLucy Whitaker氏に確認して頂いた。また額縁に関する情報はNational Portrait Galleryの



【図8】
養育院の印章（seal）として最初
に用いられた図案

いたものだとすれば、問題の楕円肖像画もヘンデルが病を発症する1750年の冬以前のヘンデルの姿を描いたものである可能性が高まる。つまり、この肖像は1750年4月にハドソンが養育院に寄贈を申し出たヘンデルの肖像画と最も近い時期の作品と推測される。

これに加え、額縁に用いられた葦（ガマ）のモチーフも養育院とのつながりを強く示唆するものと考えられる。なぜなら葦のモチーフは聖書に登場する最初の捨子でもあるモーゼの象徴として養育院設立時から繰り返し用いられ、理事会室に飾られた絵画とも密接な関連を持つものとなっているためである。この葦のモチーフを最初に養育院の視覚的表象と結びつけたのは創設者コラム船長であった。養育院の印章（seal）として最初に用いられた図案は1739年8月24日にコラムが思いついた原案に基づき、ファラオの娘と侍女たちが葦（パピルス）の葉で編んだ箱舟の中にモーゼを発見する場面（出エジプト記2: 8-9）を表す【図8】³³⁾。この印章にはモ

Jacob Simon 氏にも確認して頂いた。両氏の快いご協力に心より感謝申し上げます。

33) 「…おとめは行って、その子の母 [ヘブル女の乳母] を呼んで来た。パロ [ファラオ] の娘は彼女に言った。「この子を連れて行き、私に代わって乳を飲ませてください。私があるあなたの賃金を払いましょう。…」 (The Maid went and called the Child's Mother, and Pharaoh's Daughter said unto her, take this Child away and nurse it for me, and I will

【図9】ヘイマン、〈葦の中での幼児モーゼの発見〉(*The Finding of Moses in Bulrushes*)、1746年、キャンバスに油彩、173 × 204cm (© The Foundling Museum, London)

一ゼを運んできた葦舟だけでなく、河辺に生い茂る葦が描かれた。さらに、後に理事会室の装飾を手がけたホガースとヘイマンは、同じ物語に基づく二点の歴史画作品を描いている。特にヘイマンの〈葦の中での幼児モーゼの発見〉【図9】では、養育院の印章と全く同様に、葦の生い茂る河岸の

give you Wages.）」(出エジプト記 2:8-9) 奇しくも同年4月には、同じくモーゼの物語を主題とするヘンデルのオラトリオ〈エジプトのイスラエル人〉(*Israel in Egypt*, HWV 54) がロンドンで初演され好評を博していた。ヘンデルのオラトリオではモーゼの発見のエピソードは扱われていないが、同じ「出エジプト記」の中からヘンデル自身が聖書の語句を選んだとされる台本も含め高く評価された (Deutsch, pp. 473-85; Burrows (1994), pp. 202-205)。聖書の該当部分および英訳は *An Account of the Hospital* を、日本語訳は『聖書新改訳』第二版 (いのちのことば社、1997年) を参照した。以下、聖書からの引用は全て同じ。

【図10】 ホガース、〈ファラオの娘のもとへ届けられたモーゼ〉 (*Moses Brought before Pharaoh's Daughter*) 1746年、キャンパスに油彩、172.7 × 208.3cm (© The Foundling Museum, London)

場面が描かれている³⁴⁾。

つまり当時の養育院では、捨子としてのモーゼを描いた作品二点を理事会室に飾ることで、葦を象徴とする幼子モーゼの物語と養育院の行う慈善活動とが視覚的に関連付けられていたと考えられる。特にホガースの〈ファラオの娘のもとへ届けられたモーゼ〉【図10】に登場する幼子モーゼは捨子を、養母となるファラオの娘は養育院を、モーゼの実母は養育院に雇

34) ホガースの〈ファラオの娘のもとへ届けられたモーゼ〉はその次の場面を描いたもので、背景にはファラオの娘の宮殿が描かれている。「その子が大きくなったとき、女はその子をパロ [ファラオ] の娘のもとに連れて行った。その子は王女の息子になった。彼女はその子をモーゼと名づけた。(And the Child grew and she brought him to Pharaoh's Daughter, and he became her Son, and she called his Name Moses.)」(出エジプト記2:10)

われて捨子の養育にあたる乳母の役割を表し、養育院の慈善活動の担い手を聖書の登場人物の姿を借りて表した作品となっている³⁵⁾。こうして養育院の慈善活動と視覚的に結び付けられた幼子モーゼの象徴である葦のモチーフに縁どられたヘンデルの楕円肖像画は、1750年以降主に〈メサイア〉という作品を通じて続いてゆく養育院とヘンデルの密接な関係を何らかの形で示すものと考えられるのである。

また、冒頭に触れたホガースによる〈フィンチリーへの行軍〉【図2】を賞品とする抽選会も、当初から養育院に作品を寄贈する目的で行われた可能性が強い。それだけでなく、ホガースは抽選を行うことで自らの懐を痛めることなく養育院への寄付を行い、そのうえ結果として自作の寄贈という篤志行為を公に宣伝することもできたと考えられる。以下に、この抽選会の開催経緯を検証し、ホガースによる絵画の抽選会が養育院に注目を集める目的で開催された可能性を検討したい。また、芸術と慈善を結びつけたこうした催しの話題性が、翌日に開かれたヘンデルの〈メサイア〉演奏会に世間の注目を集める一助となった可能性についても考えてみたい。

そもそも〈フィンチリーへの行軍〉は養育院からの注文を受けて制作された作品ではない。この作品は1745年のジャコバイトの乱の際の出来事をコミカルに描いた「喜劇的歴史画」であり、役員室に寄贈展示された歴史画作品とは全く異なる性格を持つ。1750年にこの絵を完成させたホガースは、翌年発売予定の版画の予約購入の募集を3月16日に始めた。この版画の予約代金（7シリング6ペンス）に加え、追加の3シリングを支払う予約者には原画（絵画）の当たる抽選券を配布するとの広告が出されたのは4月23日のことである。この間にホガースは1843枚の予約・抽選券を販売し、920ポンドもの利益を確保したとされる³⁶⁾。

ホガース自身はこの原画の販売価格を200ポンドに設定していたようだ

35) Paulson, *Hogarth*, II: 334-338.

36) このうち抽選券の分は276ポンドのため、この分が売り上げ全体の約3分の1を占めたことになる。(Paulson, II: 358)

が、結果として抽選券の販売額だけで、この設定価格を大幅に上回る事となった。さらに2000枚の内、売れ残りの抽選券57枚全てを養育院に寄付することで、ホガースは原画が養育院の手に渡る確率を高めようとしている。結果は先に述べたように、養育院が当選者として原画の寄贈を受けることとなるのだが、どうやらホガースは、仮に他の予約者が当選した場合にも当選者が原画を養育院に寄付する可能性や、養育院が原画を競売にかけることによって利益を得る可能性まで想定していたようである³⁷⁾。

実際、原画が養育院へと引き渡された抽選日の夜にアンカスター公爵が現れ、原画を200ポンドで譲ってもらえないかと申し出た。ホガース同様に古くから養育院の理事を務める公爵は、まるで申し合わせたかのようにホガースの言い値を提示し、養育院の譲り受けた〈フィンチリーへの行軍〉の原画には200ポンドもの価値があることを公に喧伝したのである。しかし公爵の申し出は養育院（と恐らくはホガース自身）によって退けられ、原画は予定通り養育院へ寄贈されることとなった。

こうしてホガースは、1747年の歴史画〈ファラオの娘の下へ届けられたモーゼ〉とは全く異なるタイプの歴史画作品を養育院内に展示する機会を得たばかりか、抽選会を催すことで作品の話題性を高めて版画の販売を促進し、さらには養育院に対する己の慈善行為を世に喧伝することにも成功したと考えられる。また、養育院側としても、アンカスター公爵によって200ポンドもの価値があると公言されたホガースの最新話題作を寄贈品として入手し公開することで、通常なら養育院の慈善活動にあまり関心を持たない可能性の高い人々の足をも養育院へと向けさせ、彼らから寄付を募る機会を確保したといえよう。

この抽選会を巡る一連の動きからは、画家・版画家でありながら理事を務めるホガースが養育院の慈善活動を巧みに利用していた事実がうかがわれる。確かに原画の寄贈は明らかな慈善行為であったにしろ、慈善を口実

37) この抽選会の結果については複数の説やエピソードが存在し、以下に挙げるアンカスター公爵にまつわる逸話はそのうちの一つである。(ibid.)

に自らの版画の販促活動をホガースが行っていた一面は否定できない。ホガースによるこうした露骨に営利主義的な行為には眉をひそめる者も決して皆無ではなかった³⁸⁾。だがこの時期、養育院での芸術家たちの活動と慈善活動が互いの利益をはかることで、密接に結びついていたことは確かである。

ホガースの抽選会はその極めて顕著な例であるにし、養育院における芸術家たちの活動と養育院の慈善活動はある種の互恵関係にあったと言える。養育院が彼らに提供した機会や場の特殊性は、施設の設立目的である慈善活動と慈善行為としての芸術活動の相互補完性を示唆するものとなっている。

4. 芸術と慈善：視覚性と可視性

当時の養育院は慈善活動を視覚化した作品に展示空間を提供するのみならず、慈善活動の可視性（visibility）を高める空間でもあったと考えられる。実際、当時の養育院には、施設の見学や芸術鑑賞といった通常は社交や物見遊山とみなされる行為を慈善に役立てることを可能にする空間が用意されていた³⁹⁾。そのためには施設の慈善活動の目的や成果等を知識として広めるだけでなく、訪問者の感覚に直接訴えかけることで伝えることを可能にする視覚性や可視性が強く求められたと考えられる。

当時の養育院には、潜在的篤志家である訪問者から養育院の慈善活動やその目的への理解や共感を得たうえで、慈善への参加（篤志行為）を促す必要があった。養育院が訪問者に求めるべき共感（sympathy）には主に、

38) Cf. George Vertue, *Notebooks*, 6 vols. (Oxford, 1934-55), 3:153, cited by Paulson (II: 358-59).

39) McClure も指摘するように、養育院は単なる慈善施設ではなく社交や芸術の拠点としての多面性を持つ。養育院と当時の社会史は多くの面で密接に関連しており、それは道徳や風習、音楽や医学、経済や教育、服飾や調理、政治や貧困、美術や建築といったものから児童の労働訓練や女性の役割にまで及ぶ。つまり養育院は当時のイギリス社会を縮図のように映し出す存在となっていたのである（McClure, p. viii）。



【図11】 ホガースによる寄付者リスト用の章飾り（1739年頃）

捨子への哀れみ (pity) や同情 (compassion) といった感情が挙げられよう。これらの感情は後にアダム・スミスが『道徳感情論』(1759年初版)の冒頭で述べるように、「我々が他の人々の悲惨を見たり、それが大変鮮明に思い浮かべられたりする際に感じる情動 (emotion) である」と理解されていた⁴⁰⁾。こうした共感 (同情や哀れみ) を生むには視覚に訴えることが最も効果的な方法の一つであるとの認識が当時流布していたことも、視覚性や可視性が重視された理由として挙げられよう。

養育院の行うべき慈善活動を視覚化する試みは、養育院の設立時から積極的に行われていた。例えば施設の設立に必要な資金の寄付者を募るリストのためにホガースがデザインした章飾り【図11】では、創立者のコラム船長が養育院の設立に至る動機や慈善の目的が、寓意的風景を背景に視覚的物語として示された⁴¹⁾。いっぽうで後に理事会室に設置されたライ

40) Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, ed. by D.D. Raphael and A.L. Macfie (Oxford: Clarendon Press; London and New York: Oxford UP, 1976), Li.L1 (p. 9). 原文より訳出。Cf. アダム・スミス著、水田洋訳『道徳感情論』(岩波文庫)全二巻、(岩波書店、2003年)上巻、23頁。

41) 遠景には教会脇の川に赤子を捨てようとする母親、近景には橋のたもとに放置されたまま

【図12】 ライスブラック、〈航海と農業にいそしむ慈善と子供たち〉、1746年、白大理石 浅彫り、30 × 47.5 インチ (© The Foundling Museum, London)

スブラックの彫刻作品〈航海と農業にいそしむ慈善と子供たち〉【図12】は「慈善」を寓意像として示し、施設が行う慈善行為の実利的目的を視覚的に示した作品となっている⁴²⁾。また、養育院の門前で勅許状を片手に籠に入れられた捨て子を見守るコラム船長の姿を描いたニボット (Balthasar Nebot, fl. 1737-62) の肖像画【図13】も版画を通じて広く流通した。

当時の養育院に求められた空間の特色について美術史家のソルキンは、

死に至る運命の赤子。画面中央には国王の勅許状を手に聖人のような姿をしたコラムの前に跪き、ナイフで我が子を殺すよりはと嘆願する母親。引き取った赤子を腕に抱え養育院へと歩みをすすめる職員。イギリス王室の紋章が飾られた養育院の戸口前では、揃いの制服を着た大勢の子供たちが各々将来の職業に役立つ道具（鋤や鎌、箒や糸車、鋏や測量具、ホーンブックなど）を手に集まり、遠くの海に浮かぶ帆船を見つめている。また、画面左端には実の母親との再会を果たす子供の姿も見える。

- 42) 目的とはすなわち、保護された捨て子を育成しイギリスの海運・農業・牧畜を担う人材を供給すること。同種の考えは既にスウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) の風刺論文 *A Modest Proposal* (1729年) の中でも紹介されており、特に目新しいものではない。養育院の慈善活動の持つ国家的意義については、1749年7月16日発行の養育院外観図【図16b】の説明書きでも強調されている。



【図13】ニボットの原画に基づくブルックの版画、〈トマス・コラム船長〉、1741年（Wellcome Library, London）V0001284

「実際の寄贈者および潜在的寄贈者を惹きつけることを可能にする物理的空間、善意の実行を促す舞台」であると説明する⁴³⁾。これは、設計当初から養育院の空間が捨子を保護する目的だけでなく、実際に寄付や寄贈を募るうえでの社交上の必要性を念頭に置いて周到に準備されていたことを示唆するものである。つまり養育院の空間は、慈善の対象となる下層階級

43) Solkin, p. 160.



【図14】 ウェイルの原画に基づくグリニョンとキャノットの版画、「寓意的人物を配した養育院の透視図 [北東方向を望む]」(1749年4月14日)、8.4 × 14.2cm (Wellcome Library, London) V0013443

の人々だけでなく、慈善を施す側である中・上流階級の人々の意識や感覚に訴えかける場として意図されていたことが暗示される。

養育院の空間に意図された役割の二重性を視覚的に示す資料として、ソルキンは1749年4月14日に出版された二枚一組の版画を挙げる。【図14、15】これらのイメージは養育院設立の目的である下層階級向けの慈善活動【図14】と、中・上流階級向けの社交の場【図15】という二つの異なる側面を寓意的人物像や彫像を画中に配して描くことで視覚的に示したうえで、韻文による絵解きを加えたものとなっている⁴⁴⁾。また、この頃から養育

44) 寓意的人物像同様、この図に描かれた養育院の建物も非現実的であり、1749年時点では未完成のはずの礼拝堂及び東翼が完成した姿で描かれている。こうした描写は建築家のジェイコブソンの図面に基づき1742年に作成された立面・平面図 (Wellcome Library, No.



【図15】 ウェイルの原画に基づくグリニョンとキャノットの版画、「寓意的人物を配した養育院の透視図〔北西方向を望む〕」(1749年4月14日)、8.4 × 14.2cm (Wellcome Library, London) V0013442

院の外観図が繰り返し描かれ版画化されることで、大勢の社交界の男女で賑わう養育院の華やかな様子が施設を代表するイメージとして一般に広められてゆく。【図16a、16b、16c、16d、16e (1748、49、51、53、54年)】⁴⁵⁾

「慈善」という抽象的な概念や行為の視覚化には寓意的イメージや肖像画、版画制作といった伝統的手法が用いられる一方で、慈善活動の目的や

36637i)に基づくものと考えられる。

45) このうち1748年と51年の図は雑誌 (*The Gentleman's Magazine* と *The Universal Magazine*) 用の挿絵として制作されたもので、より多くの人々の目に触れたと考えられる。当時の養育院の公的イメージについてはNolanによる詳細な研究がある。Andrew Nolan, "Philanthropy and Visual Culture in Mid-Eighteenth Century Britain: The Public Image of the London Foundling Hospital, 1739-1760," unpublished Ph.D thesis (Norwich: University of East Anglia, 2002), pp. 97-199.



【図 16a】養育院外観図（1748 年）
（Wellcome Library, London）
V0013458



【図 16b】養育院外観図（1749 年）
（Wellcome Library, London）
V0014672



【図 16c】養育院外観図（1751 年）
（Wellcome Library, London）
M0013522



【図 16d】養育院外観図（1753 年）
（Wellcome Library, London）
V0013449



【図 16e】養育院外観図（1742-54 年）
（Wellcome Library, London）
V0013456

成果を可視化するために、慈善行事の広報や施設の内部公開といった手法も積極的に採用された。

特に養育院が中・上流階級向け社交の「舞台」として相応しいことを示すために強調されたと思われるのが、社交界の女性（貴婦人）の存在である。というのも養育院創設のきっかけとなった最初の嘆願書（1729年3月のThe Ladies' Petition）では女性の署名が集められたという経緯にも関わらず、養育院の活動の社会的道徳性について強い疑念を示したのもまた当時の女性達であったためである⁴⁶⁾。結果として実際の養育院の設立や運営は女性の関与を全く欠いた形で進められることとなった。こうした状況の中、施設の慈善活動の道徳性を擁護する一つ的手段として、女性の関与を眼に見える形で示す必要が生じた。つまり、「貴婦人の朝食会」やヘンデルの慈善演奏会への有力な上流貴婦人の招待などは、女性による積極的関与を視覚的に示す機会として利用されたと考えられる。

当時の慈善団体が行う慈善行事の多くは、一種の社交行事として施設の慈善活動と社交界との接点を生み出す目的で考案された⁴⁷⁾。養育院での例としては、多くの貴婦人を集めた朝食会や洗礼式の開催、美術愛好家を集めたホガースの抽選会、音楽愛好家を集めたヘンデルの慈善演奏会などがこれに該当する。

併せてこれらの慈善行事を新聞広告や記事などの出版物を通じて報じる

46) 当時、同様の問題を抱えていたのが娼婦の保護・更生施設として18世紀半ばに設立されたマグダレン協会の施設（Magdalen House / Hospital）である。この施設の詳細については後掲のVan Santの書（pp. 31-37）を参照。

47) Lloydは当時のロンドンでは慈善活動が劇場のような社交空間に拡大し、慈善施設を訪れる人々は施しを受けるに相応しい貧者を「眺める」こと（to see）だけでなく、施しを行う自らの姿を「見せる」こと（to be observed）を重視したとする。その証拠としてLloydは、街中での華やかな行列に豪華な会食会や余興といったものに当時の慈善団体がかなりの資金と手間を費やしている点を挙げ、こうした慈善行為の誇示こそが当時の慈善活動の中心を成したとする。Sarah Lloyd, 'Pleasing Spectacles and Elegant Dinners: Conviviality, Benevolence, and Charity Anniversaries in Eighteenth-Century London,' *Journal of British Studies* 41 (2002): 23-57, pp. 24-25.

ことで、施設の慈善活動の成果が広く喧伝された⁴⁸⁾。というのも教区教会の行う貧民法に基づいた慈善活動とは異なり、当時の慈善団体には活動の成果を篤志家らに明瞭なかたちで伝えることが求められたためである⁴⁹⁾。その一環として、慈善行事から得た寄付や収入の金額も活動成果として積極的に情報公開された。例えば1747年の洗礼式では、募金箱から100ポンドもの大金が見つかったニュースが『ジェントルマンズ・マガジン』誌で報じられたほか、寄付金を受け付けないヘンデルの慈善演奏会の場合には演奏会からの多額の収益が度々報じられた。こうした報道が複数の新聞・雑誌を通じて広く行われたことから、実際には行事に足を運ぶことの無かった多くの人々に広く活動成果を伝えようとした養育院側の狙いをうかがい知ることができる。

さらに養育院では、慈善の救済対象となる施設の子供たちの姿を積極的に公開することで「共感的可視性 (sympathetic visibility)」が実現されたと考えられる⁵⁰⁾。ホガースによる子供たちのための制服デザイン (1745年頃)【図17】も、訪問者の目に触れることを強く意識して、開設当初から計画されていたことが募金者リストの装飾【図11】からうかがわれる。また、多数の見物客を集めた礼拝堂での洗礼式や子供たちの参列した日曜

48) 後に出版されたものとして Jonas Hanway の 1759 年の書 (*A Candid Historical Account of the Hospital for the Reception of Exposed and Deserted Young Children. To which is Added a Letter from a Country Gentleman [entitled] The Genuine Sentiments of an English Country Gentleman upon the Present Plan of the Foundling Hospital*, London, 1759) が知られるが、本論文では 1756 年以降の議会からの補助金に起因する問題は扱わない。50 年代後半以降に養育院が巻き起こした社会的論議の詳細については Nolan や Andrew の研究を参照。Nolan, “Philanthropy and Visual Culture” (2002) ; Donna T. Andrew, *Philanthropy and Police: London Charity in the Eighteenth Century* (Princeton: Princeton UP, 1989), Chapter 4.

49) 貧民法による慈善と養育院のような公共団体が行う慈善の比較については Van Sant の議論を参照。Ann Jessie Van Sant, *Eighteenth-Century Sensibility and the Novel: The Senses in Social Context*, (Cambridge: Cambridge UP, 2004), p. 22ff.

50) Van Sant は、当時の公共慈善団体が「共感的可視性」を生み出した方法として、社会的弱者を抱える「問題のタイプ」により分類し集団として隔離したことを挙げる (p. 28)。「共感的可視性」に関する議論は Van Sant (Chapter 2) を参照。



【図17】ホガースによる子供たちのための制服デザイン（復元）
（1745-46年）

礼拝に加え、日曜日以外は施設内の庭園を開放し、訪問者が子供たちの遊ぶ様子などを見学できるような配慮がなされた⁵¹⁾。子供たちが聴衆として参加したヘンデルの慈善演奏会も、こうした「共感的可視性」を高める機会の一つと見るべきであろう。

特に慈善演奏会への子供たちの出席は観客の同情心に訴えかける目的でなされた可能性が極めて高い。当時の手紙の記述からは、演奏会を聴きに訪れた女性たちが「哀れな幼い子供たち」の姿に感銘を受けた様子がか

51) 庭園の開放は1756年3月以降だが、1753年には西翼のキッチンが工房に改装され、子供たちが職業訓練を兼ねて行う様々な作業を通行人が眺めることができるようにされた(Nichols and Wray, p. 290; Van Sant, p. 40)。特に人気の高かった礼拝堂内の信徒席は一人年1ギニーで貸し出された(McClure, p. 72)。ただし養育院は教育上の理由からも、子供たちの可視性を厳密に管理した。例えば1749年に礼拝堂一階部分の窓を全てレンガで塞ぐことが決定されたが、これは寄付金を払わない興味本位の見物人の視線を妨げるためと思われる(Nicolson, p. 40)。また、1755年には訪問者に同行する召使や従僕などの「不適切な人間」と施設の子供たちとの接触を防ぐための対策が立てられた(Nichols and Wray, p. 290)。

がわれる。

礼拝堂は素晴らしいですし、こんなにも多くの哀れな子供たちが（うまくいけば良いのですが）育てられているのを見ることは心地よいものです。（1754年5月16日付メアリー・デラニーの手紙）⁵²⁾

捨子養育院では、「慈善演奏会という」善意の企画もあり、幼い少年少女たちも出席しており、この最も崇高な作品〔〈メサイア〉〕さえもが格別な美しさを増すのです。（1756年4月13日付キャサリン・トルボットの手紙）⁵³⁾

当時はまさに感傷主義の時代であり、男女を問わず優れた感受性（sensitivity / feeling）を示すことが求められた。つまり、こうした共感的反応は必ずしも女性に限定して求められたわけではない。だがいずれにしろ、こうした「哀れな幼い子供たち」の姿を直接訪問者の眼に触れさせる機会を設けることが、子供たちへの同情（共感）を誘ううえで非常に効果的であったことは確かである。

以上の事例からは、当時の養育院が慈善活動の視覚性や可視性を高めることに熱心であった事情が明らかとなった。確かに絵画や版画作品を用いた慈善活動の視覚化や、施設の公開を通じた活動成果の可視化は、当時のロンドンにあった他の慈善施設や団体でも試みられていた手法かもしれない。だが、養育院の積極的取り組みはその最も顕著な例の一つに数えられるのではないだろうか。

52) 'The chapel is fine, and the sight of so many poor children brought up (I hope to good purpose), was a pleasant sight.' (Deutsch, p. 750)

53) '...at the Foundling Hospital, where the benevolent design and the attendance of the little boys and girls adds a peculiar beauty even unto this noblest composition [Handel's *Messiah*].' (Deutsch, p. 773) トルボットの記述は、〈メサイア〉の上演される場としてロンドンの劇場が相応しくない理由の一つとして養育院の慈善演奏会の適切さを挙げており、当時の〈メサイア〉演奏の受容のあり方を知るうえでも重要な証言となっている。

5. 結び

ヘンデルの〈メサイア〉慈善演奏会の成功は、演奏会場をロンドンの商業劇場という世俗的空間から養育院附属礼拝堂という宗教的空間へと移したことで単純にもたらされたわけではない。確かに世俗の劇場における宗教的オラトリオ作品の商業的上演には当時、度々疑義が示されていたことは紛れもない事実である。本稿では、養育院がヘンデルに提供した機会や空間がなぜ〈メサイア〉の上演に大きな成功をもたらしたのかという問いに対し、当時の養育院の慈善活動と密接に関わる芸術家達の活動、なかでもこうした活動のもたらす視覚性や可視性との関連に着目して検討を行ってきた。

当時の養育院と芸術家達との関わりは、慈善行為を行う地位にある「紳士」としての芸術家の社会的地位向上を示唆するものである。特に「芸術家理事」として認められることは、芸術家自身の社会的地位のみならず作品の価値をも高める機会を提供し、主な顧客である上流階級との交渉に有利な状況を生み出した。実際には他の作品の受注を図る試みは失敗に終わったものの、当時最も高額で取引された歴史画作品の常設展示は画家たちの高い期待を示すものであった。また、唯一の経済的成功例ともいえるホガースによる慈善抽選会の開催は、寄付行為と作品販売という二つの異なる目的を同時に達成する全く新たなモデルを画家たちに提供した。同様に、養育院での慈善演奏会の評判が音楽家としてだけでなく篤志家としてのヘンデルの名声を高めたことも事実である。

ヘンデルの〈メサイア〉慈善演奏会を訪れた観客たちには、当時のイギリスを代表する芸術家たちの作品鑑賞を通じて養育院の慈善活動を理解し、共感を覚え、篤志家として貢献することが求められた。演奏会の際にハリスが眼にした〈マギの礼拝〉【図3】や〈キリストの下へ届けられた幼子たち〉【図4】といった絵画作品の主題が〈メサイア〉の主題である救世

主キリストの物語と関連付けられたことはほぼ疑いない⁵⁴⁾。そこには当然、キリスト＝救世主（メサイア）による人類の「救済」に、篤志家による捨子の「救済」という現実の行為を重ねる意図が込められていたと考えられよう。養育院による「救済」活動の成果を公開し可視化することには、養育院の慈善活動への理解、共感、参加を観客に強く促す目的があったと考えられる。

もちろん〈メサイア〉の音楽や歌詞自体のもたらす共感作用についても十分に音楽的な分析や検討を加える必要が生じよう。本稿で指摘したような芸術と慈善の密接な連携やその視覚性や可視性にまつわる問題は、ヘンデルの〈メサイア〉慈善演奏会が当時の観客に受容された歴史的文脈の一部を明らかにしたにすぎない。しかしながら、当時のこうした作品受容のありかたに関する理解が〈メサイア〉上演史の全体像をより正確に把握する一助となり、今後の〈メサイア〉上演に僅かながらでも資することを願う最後の結びとしたい。

図版出典

【図1】、【図8】 Nichols and Wray (illustration facing p. 201)

【図11】 Nichols and Wray (detail of the illustration facing p. 278)

【図17】 Riding (cat. 11)

54) 「[人々がイエスのもとに幼子を連れてくると、弟子たちがそれを叱った。それに対するイエスの言葉] 子供たちをわたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。(Jesus said, suffer little Children to come unto me, and forbid them not, for of such is the Kingdom of God.)」[続けて、まことにあなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこにはいることはできません。] (ルカの福音書 18:16) 額装に示された出典元は「マルコの福音書」(10:14)であるが、ここでは *An Account of the Hospital* (p. xiv) の記述に基づき「ルカの福音書」の対応箇所を示す。Cf. Jean André Rocquet, *The Present State of the Arts in England* (1755), cited by Paulson, p. 164. 理事会室に飾られた四点の歴史画作品のうち、「創世記」(21:17)に基づくハイモアの作品を含め他の三点が旧約聖書からの主題に基づくのに対し、ウィルズの作品のみが新約聖書に基づく。